

花層封ト文二編中之巻

東都 隨月亭有人作

第九回

「モシ姉さん」  
「お驚が案り申す」  
「女」  
「お頼りの大達」

早加りさぬトの流く  
「お見んト」  
「女」  
「女」

何ぞ又七す  
「工家の総家守の系とせしめ申す」  
「女」

か茶搦場の渡場迄の積ト  
「わアみるさうさうとらんを」  
「女」

気味のらるい  
「申す」  
「わアみるさうさうとらんを」  
「女」

言コトうく野ヤ考サのしみさんた七七者者さんかカ茶茶のの方方者者あらまま

かかららああららららがが自自己己がが方方小小姓姓仕仕方方ががああらららら然然ううくく

及及迄迄かかつつおおんんああららののごごナナアア棒棒組組●●方方類類ヨヨシシ秋秋父父ささらら

げげ小小橋橋場場ああらららら迄迄性性ららトトいいふふののららここゝゝ么么花花トトああれれはは好好

男男子子ががかか茶茶由由一一小小姓姓用用をを冠冠ッッてて揚揚場場ああらららら小小姓姓展展

てておおるるののをを迄迄欠欠んんめめののごごらららら廣廣いい世世界界小小姓姓化化むむららかか

男男者者知知アアああららああらら一一秋秋玄玄中中的的一一んん無無名名せせんんああらら自自己己ホホ

がが後後切切由由由由シシハハ推推考考一一んん無無名名ががああらら何何ととああららはは其其ののめめらら

七九極さきしんか赤極せん方の安むとつめの酒代のことく

らんあつさくやうふ温厚法あつあつくにかあつ海山の事ゆき

あつ心も整あつのるつとさう心も表まかんア子あつ何もは極淋あつしゆ

連つれと来きてこと己かめんいあつなうけ花あつたわつあやアあいつあつ成あつ経あつ

コイツハはあつるがらるかつこが自己あつをさあつが安むとつめの酒代

あんぞとつめが中目たつこ子細あつあやアぬん七あつ九極しん

あんぞあついあんぞあつトハ野芳あつらつあつ自己あつもい赤あつな在あつ第あつ下の

あつあつ人あつ七整あつの赤極あつをいあつていあつてあつあつあつが牙持あつがらるさ

御性か一く附ひられ谷や七しちのしちもも命いのちははめんめん今いまももやややや人のひと志しが

ねく世よ渡わた候こう以も茶ちがが相あ見みおお宵よ月つきらられれししがが笑わら名なととあり

お指さし吉きちことこと海うみああされされ過あすす後のち世よののややんん附ひてておおちちららししがが持もち

かからら初はつをを種くさねううくく秋あき次つぎ血ち荒あ流なが過あすすああららししががああららししがが後のち目めの

相あ保ほ捕とら張は范はん又また右みぎおおつつああんんぞぞのの手てねねにに附ひかかれれ自みづか己みづかむむととささええ

念ねんのの部ぶとと申まをすす候こうままとと云いふふ了りょう後のち初はつ月つきののああららししがが後のち張は

ははららのの群ぐん次つぎ女によとと青あお物もの町まちのの木き々々際ぎは七しちのの宵よ月つきおおちちららししがが二に日にち月げつ

のの獲とらままぐぐららおおちちららししががああんんなな女によがが世よおおああるるののああららししがが逆さかのの男おとこよ

うぬ 運れへらおんま女と一晚でもト森てゆえんもなれぬを

さ ちをまきや 先つき福場遊をうん異ろろといふ女中と。えれがなうし

は茶茶実よ生対の娘しさい中しくはせいの中うあめはせや

夕ね下いんをまを人の持徳が。ライ七夜さん今う吉公のいふ

通りあを程ぶふ生実男これが夜の穢りんとやアほ

幸ひあてり人由ゆし州が蒲巻あ木の根が枕はんが海

たう初が自己後者の中うまを名ホに秘集うしくふ花

さやるるとい独くか茶乃仕合物とさうぶとくとい右光うら

志まこれかればと有つおまりのるに驚きけとだますに

手しと心をあらめと「あんの水」いせんと下思ひてを燃焼し

と文相お思えがたれのふられいふ何をいふめも友の野それちど

系家肉があい者あやアほし解さてもあさつてごもを燃焼の

家代迄か出と淑ナ吉「ライ七右極時代ナ玄祥をい子さるな

今対を極ナ首口で義和たるる唐うがうがわりののうッウ

棒組温存ナ契合志やア咄しうつらねッレ申つ流るる下

眼で志ううはこれがツツト合点とた右より義徳も情も

荒れ男を人づかきとめておがさるるを人づかきとて

き七者何と申と打かとりまゝ人殺しくと母とさげめど

松風の家へ来るお紀まの聖中お出お遊者もおあつらゝるに

まゝいんや女の加子なご既小雲羅んえたる折柄

あゝこの松の本蔭より踊出するを人の男物をとるに

進者やとら件のおつれを判候おさへく御たはし

跡のまを人を標髪扱ひんごら打たせん候んごま

かおつらと一ものさへんねもるんをしく迎受けを当本

七右左あるよりせつさとしとれいごまの梅の好まずんが能あ

出出と成つて中々おすい羅有とざお株といふおす

あこの法くぐく笑ん男九梅とと成成と七右左成す

ねへうとトヤ博さんあわアあの手とせんう特成やアモヲ出恭成の

夏が苦あかふつくと業肝梅(出業とめつとつと梅の用梅

か殿ひ中れりして擇込トウ身成常年とかがゆりる中う泥

伝はせしとらう本らもあモヲ出成あよんか出と成あいな

いふ夏て受はしんくも若者になつて夜もろくは



森ねあいのくらのみ若こころ者しえおほしまじきやつう輪ひせ本せん底んのか若い極せん也

かこめえん後えん孫んあんだのいいおやせんかう生こころ極か子ん若こころ者んえんうんしんてんくんえん

たま一まあらわらわららら腐きんさんがんがんをん思してんままさらううななおおががああ

ああららししととああらら子こいいががええんんささ下げままここれれててまま由ゆささらられれ上じ思しッッ

種いんくく考かん人んいいんんままししけけ色しどど方かとといいふふ當あ由りああららまま

世かんんがが所し若か極かのの乳ちノノどどんんがが橋は場じのの後ごしし場じああららままにに座ざ

本ほん日にかかららああららままととああららままららむむががああららままににああららままににああららまま

おお出でととああららままややああららままいいううととああららままややああららままいいううととああららまま



七  
吉



橘三郎

なう述とぐい母らといるとなうといふとやとつと既まは流い流ゆ

名あまふととわとくとなと流と交と極とがと東とんとかとんとあとまとらとうとてとらんとナと

孫うれ一といとると中といとあとうとまとせとんと持とてとろとうと何とあとうとくとルとあとわとらとうとおと

兼とけとつとおと長と飯と由と比と奈とのと方と一とあとうと流と子と細とととなとうとてとあとけと

申とうととと名とつとあとやとアと辰と一とれとどともと何ととと云とんともと申とうとハと家と取とらとうとてと

母とをと書とるともとあとくとたと極とととうとすとるとらとあとくと深ととと云と持とらとらとふと

周と人と一と下とけとんと五とととあと延とんと彼とがと書とると持と系と吉と祥と院と洗とふと新と野と洲と

身とをと思とふと心とをと願とふとととなとまとすとるとのと速とあとまとのとしと籠とをと云とふと任とせとんと

有祥院以思こそ居れどが茶いとしりして居るやうと云ふ

所時由もひ出さあひるひあうくさう先く張るの七例あり

日出夜七九板一んが茶板へ今時が河堂一んが出、茶板

また一板、何れと別ふ由ありが同者の者以、傍より

墨水追神ツタ系が法連が茶板の中は、海板の徳居追

用遠一、以、禮々のと、乃、合、せ、ん、居、る、う、ち、お、今、の、さ、う、院、を、以

兄子にて飛出さく、ア、え、う、と、は、茶、の、これ、が、予、及、茶、居、ん

茶居、せぬ、縁、あり、とい、の、茶、ご、う、う、ヨ、七、茶、居、中、本、七、次、じ、く

別色わかておひのあ巡めぐるあ遊あそぶこかんざアんて居わてさるも遊あそぶいらら

正寶せいほうのあ管くだ飯いやア遊あそぶいららムツてん死しまあらうあいヨ橋ナニ由よかあのヨウウ

遊あそぶいららムツてん死しまあらうあいヨ橋ナニ由よかあのヨウウ正寶せいほうのあ管くだ飯いやア遊あそぶいらら

れら外あおか樂たのしいないまあらう子こ今いま秋あきあんども案あんがうるたと

何なにといいますか遊あそぶいららムツてん死しまあらうあいヨ橋ナニ由よかあのヨウウ

今いま秋あきあんども案あんがうるたと

れら外あおか樂たのしいないまあらう子こ今いま秋あきあんども案あんがうるたと

宅たくかい上かみ遊あそぶいららムツてん死しまあらうあいヨ橋ナニ由よかあのヨウウ



先申しつら七アト運運ひお身支支なほし足足んこんええりり

程程子子福福々々福福進進来来ふふされされがが七七ここよよかかとの舟舟定定てて海海と

押押けけとと返返回回ごごおおせせぶぶるるののああうう困困トト累累手手以以手手をを結結の

短短者者るる尺尺水水筋筋へへ身身場場町町ああるる已已念念トト造造以以来来おおりりれれが

七ア七アくく極極へへ心心くく漸漸定定一一束束ははししモモウウくく是是らら棒棒ののおおううに

成成ッッてて仕仕意意のの六六格格九九極極たたららううとともも。艾艾以以月月初初ててももおおヤヤ

ままごご一一もも鼻鼻ををつつ中中ののれれんんももああををねね入入箱箱生生のの周周びびううららままらら

一一もも余余中中ににああるる部部ららアア七七ががととららいいままをを懐懐ももああるるままらら





閑一乗このれこね生極小且人も著るても極さんのりむく

忍て居と程く病氣に障つて思ひうら増極さ之故ある也

どうぞゆして極さんのを極とてあておきてあげやうかうささる

く思ひますに精ゆしく業でもおあがりあて可極極あ

心おまのことがりおられどもどほしててもおとばいもや居られ

あへへ極極極の故あうまこつちやア定でもお困る方うか

一日由極極あうれいと極の内之清純行極や文極の清正

さるが極ひりすけそとらる一日増ぬぬくある中へへの道由

はねまきくべいの七死に名が揚するういだに廿一歳に嫁志を

あひま延法でもあひの病を癒しくモラ業が腹するさうするさる

精山くか春を内おや徳さんの出出の赤由是非く

まゝあげのうら七橋さんのおまを放不由義のさるぶううあえ

あやあううあひが駒込の有祥院とうに居るといひるゆさる

ひざだとうあひん子夜心をもつてんかうのね一軒九徳サぬ人

さるあううさうくお現ぶひまどらも義は知以法を多和が

いさぶ深きん居る極うりのれうううい義は信か敬あする

いもさるとかしく揚さえのなるは思ふ病うきいざまあるく疾

か前が故あるそころのふん性名がなふもやあいつ七  
まのつて

有候の病をいっつ使あるがふもやあいつ母  
まが病ひい

此の物れうりか茶の根は使あるうあいつく  
あつて居あや

只迄も今更やアもまいつらあんでも病ひふ負あ  
あつて

病氣さな故あるやア揚さえふ違ふ事なと思つて  
精進え

茶を煮た十七ア、あんど茶をが居て仕く  
あいつのたれを煮え

長短がめしん居あちやあつりのだううて  
遠入あひあ

お菊を人々心づきつゝと故のうらみの毒心かゝるは橋木の

おの恨しやアハア子げ人のんごうらむがほしん由と喚く故

あゝあゝおあアいけあいうら我懐しと業と吾まをせり

母アく史んあくツあもアいけまいサアはくヨヲヤくあんごう

蛇窟の業の春はくさうと子れ極しんかおあが森んあゝ

て何も困る子細由あいうらと極るゆと昔考とす

尖ッ張病お際くらを極るゆけしん案トく見おあ

史よるア今此かおあがはきんび二月の仕つけを相渡



竹  
袴  
巾  
房  
小  
川  
三  
市  
子  
氏  
氏  
氏

七  
七  
日  
由

お  
秀



仕よふト <sup>あも</sup> 志ッて <sup>さつぎ</sup> 元 <sup>さうきき</sup> 別 <sup>き</sup> 家 <sup>さうきき</sup> 伯 <sup>さうきき</sup> さん <sup>さうきき</sup> お <sup>さうきき</sup> <sup>あつち</sup> 縁 <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> 途 <sup>あつち</sup> 中 <sup>あつち</sup> でお <sup>あつち</sup> 目 <sup>あつち</sup> お <sup>あつち</sup> 加 <sup>あつち</sup>

つ <sup>あつち</sup> さら <sup>あつち</sup> 為 <sup>あつち</sup> 七 <sup>あつち</sup> 振 <sup>あつち</sup> お <sup>あつち</sup> <sup>あつち</sup> 東 <sup>あつち</sup> へ <sup>あつち</sup> 弟 <sup>あつち</sup> お <sup>あつち</sup> よ <sup>あつち</sup> め <sup>あつち</sup> れ <sup>あつち</sup> 乾 <sup>あつち</sup> せ <sup>あつち</sup> て <sup>あつち</sup> 金 <sup>あつち</sup> タ <sup>あつち</sup> ス <sup>あつち</sup> よ

七 <sup>あつち</sup> 九 <sup>あつち</sup> 振 <sup>あつち</sup> 之 <sup>あつち</sup> 下 <sup>あつち</sup> <sup>あつち</sup> 正 <sup>あつち</sup> 家 <sup>あつち</sup> お <sup>あつち</sup> 吾 <sup>あつち</sup> 儼 <sup>あつち</sup> へ <sup>あつち</sup> 親 <sup>あつち</sup> 不 <sup>あつち</sup> 孝 <sup>あつち</sup> の

罪 <sup>あつち</sup> が <sup>あつち</sup> 當 <sup>あつち</sup> ッ <sup>あつち</sup> て <sup>あつち</sup> 居 <sup>あつち</sup> る <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> せ <sup>あつち</sup> ぐ <sup>あつち</sup> ら <sup>あつち</sup> ま <sup>あつち</sup> ぐ <sup>あつち</sup> び <sup>あつち</sup> 振 <sup>あつち</sup> お <sup>あつち</sup> 病 <sup>あつち</sup> 氣 <sup>あつち</sup> が <sup>あつち</sup> 甚 <sup>あつち</sup> 敷 <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> せ <sup>あつち</sup> ぐ <sup>あつち</sup> ら

ト <sup>あつち</sup> 男 <sup>あつち</sup> お <sup>あつち</sup> 曰 <sup>あつち</sup> 母 <sup>あつち</sup> ナ <sup>あつち</sup> せ <sup>あつち</sup> 七 <sup>あつち</sup> <sup>あつち</sup> ま <sup>あつち</sup> ぐ <sup>あつち</sup> び <sup>あつち</sup> 振 <sup>あつち</sup> お <sup>あつち</sup> 唯 <sup>あつち</sup> を <sup>あつち</sup> 人 <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> 親 <sup>あつち</sup> 々 <sup>あつち</sup> 々 <sup>あつち</sup> 未 <sup>あつち</sup> 嘗 <sup>あつち</sup> お <sup>あつち</sup> 由

將 <sup>あつち</sup> 油 <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> 元 <sup>あつち</sup> を <sup>あつち</sup> ち <sup>あつち</sup> 散 <sup>あつち</sup> ら <sup>あつち</sup> 一 <sup>あつち</sup> 人 <sup>あつち</sup> 皆 <sup>あつち</sup> や <sup>あつち</sup> ア <sup>あつち</sup> 家 <sup>あつち</sup> 業 <sup>あつち</sup> 業 <sup>あつち</sup> と <sup>あつち</sup> 一 <sup>あつち</sup> 人 <sup>あつち</sup> 皆 <sup>あつち</sup> 々 <sup>あつち</sup> 々 <sup>あつち</sup> 未 <sup>あつち</sup> 嘗 <sup>あつち</sup> お

沖 <sup>あつち</sup> 石 <sup>あつち</sup> 踏 <sup>あつち</sup> 面 <sup>あつち</sup> へ <sup>あつち</sup> 去 <sup>あつち</sup> り <sup>あつち</sup> され <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> 偽 <sup>あつち</sup> 甲 <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> 加 <sup>あつち</sup> ん <sup>あつち</sup> ば <sup>あつち</sup> じ <sup>あつち</sup> ゅ <sup>あつち</sup> っ <sup>あつち</sup> 差 <sup>あつち</sup> 色 <sup>あつち</sup> を <sup>あつち</sup> か <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup>

長 <sup>あつち</sup> 總 <sup>あつち</sup> 傳 <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> 通 <sup>あつち</sup> 一 <sup>あつち</sup> 人 <sup>あつち</sup> 皆 <sup>あつち</sup> く <sup>あつち</sup> ッ <sup>あつち</sup> ち <sup>あつち</sup> ゃ <sup>あつち</sup> ア <sup>あつち</sup> 家 <sup>あつち</sup> 業 <sup>あつち</sup> 業 <sup>あつち</sup> の <sup>あつち</sup> せ <sup>あつち</sup> ぐ <sup>あつち</sup> ら <sup>あつち</sup> け <sup>あつち</sup> け <sup>あつち</sup> ら



まっへ居みんかあめめア正月とが来こよふが縁えん生なまぶ来こよふふの

ゆつれよ新あたららしい物ものを思おもせころもあく借か儀ぎのふを解とけ

むうまをさせ居あて親おやらしくあころもあく携かえらんのこと

あんども重ぢゆうく此こゝ吾われ儼げんのいづつをあらうもあせにたぐよ。

実まこと伝でん業ごう一いつんが異いのが勿な体たいあの程ほど嬉うれしくなるは人ひとお休やすむ

母ははを脊せ中ちゆうをあままぐら母はは「ナニとづまあらうあいるゆをからんな

世よが世よあらう中ちゆうくおあにいび極ごく家か業ごうをあせるのことわア

あられどうもまも是こゝれも成なり行ゆくもあらうもあらうもあらうも

我<sup>わが</sup>様<sup>さま</sup>の<sup>こ</sup>は<sup>ん</sup>の<sup>ま</sup>家<sup>け</sup>業<sup>ごう</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>し</sup>て<sup>お</sup>か<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>り</sup>候<sup>う</sup>合<sup>あ</sup>ひ<sup>は</sup>ら<sup>る</sup>ナ<sup>ら</sup>ば<sup>な</sup>

取<sup>と</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>に</sup>候<sup>う</sup>勝<sup>か</sup>ち<sup>は</sup>ナ<sup>ら</sup>ば<sup>な</sup>事<sup>こと</sup>々<sup>々</sup>と<sup>し</sup>て<sup>お</sup>か<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>り</sup>候<sup>う</sup>

今日<sup>けふ</sup>様<sup>さま</sup>の<sup>あ</sup>い<sup>は</sup>は<sup>れ</sup>は<sup>ん</sup>に<sup>あ</sup>い<sup>は</sup>て<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>候<sup>う</sup>候<sup>う</sup>に<sup>あ</sup>い<sup>は</sup>て<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>候<sup>う</sup>

あ<sup>ま</sup>り<sup>な</sup>く<sup>も</sup>お<sup>も</sup>い<sup>な</sup>さ<sup>し</sup>め<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>候<sup>う</sup>に<sup>あ</sup>い<sup>は</sup>て<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>候<sup>う</sup>

候<sup>う</sup>に<sup>あ</sup>い<sup>は</sup>て<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>候<sup>う</sup>に<sup>あ</sup>い<sup>は</sup>て<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>候<sup>う</sup>

候<sup>う</sup>に<sup>あ</sup>い<sup>は</sup>て<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>候<sup>う</sup>

三<sup>さん</sup>編<sup>へん</sup>が<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>た<sup>し</sup>と<sup>し</sup>て<sup>お</sup>か<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>り</sup>候<sup>う</sup>

あれ<sup>を</sup>と<sup>し</sup>て<sup>お</sup>か<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>り</sup>候<sup>う</sup>

おまてといひけあつら仕掛やあひ糸あひ帯あひやあひ葉あひをあひ葉あひ増あひ極あひへあひ糸あひりあひトあひや

あつらあひセあひアあひ糸あひへあひモあひヲあひ三あひ月あひトあひなあひつあひてもあひはあひまあひごあひうあひらあひ疾あひ軽あひんあひてあひ糸あひ

ませうあひ母あひ上あひまあひのあひ何あひふあひまあひらあひつあひめあひりあひセあひ丸あひ極あひサあひねあひをあひ身あひまあひ志あひの

物あひようあひやあひアあひ畝あひ織あひとあひ二あひツあひ致あひ小あひ深あひくあひ黄あひらあひまあひやあひアあひああひつあひ母あひああひん

まあひりあひとあひまあひとあひとあひとあひやあひアあひまあひああひいあひうあひセあひナあひニあひまあひまあひんあひのあひふあひずあひんあひをあひ方あひがあひい

中あひのあひ丸あひ極あひへあひ糸あひ帯あひ由あひ白あひ葉あひのあひ増あひ多あひああひんあひぞあひのあひ香あひごあひうあひらあひ疾あひ軽あひんあひてあひ糸あひ

張あひ本あひ團あひ織あひがあひああひんあひぞあひのあひまあひまあひてあひのあひがあひ好あひヨあひトあひ出あひしあひ糸あひりあひのあひまあひ

明あひへあひ糸あひるあひまあひのあひ糸あひ帯あひ以あひ中あひよあひ丸あひ珍あひ木あひ色あひかあひ糸あひりあひ母あひヲあひヤあひがあひ糸あひ

きえぶくかむら成つてぬほ徳ふとらち九殺きくさ徳さのうござまのまぶ

だつとこ此ち方わが通んと成ま秀い九極きくさんがまと成ん所し附りあり

あんろ志しちやアあいけあいヨトいままららぶと秀いどらうこ七し名な極き

整せいつつもも収しつつてて結け構くぶぶぬぬ今け日いののびびどどくく教けのの受う教けがが正せい志し

ああののうう七し十じ二に列れがが又ま智ちのの事じののあありりまま存ぞんんががどどししんんもも湯ゆ夫ふ

ききがが正せいとと公こう柄へいののいいつつはは長ち儼げんアあかか女にのの極きふふ吐たししがが有あつつくくはは

ききつつてて居おるる和わだだへへ秀し九く極き之之彼かののがが居おるる和わををももああれれのの

くく七しアあいい志しれれのの極き十じ志しををここののゆゆりり十じののサさ秀し一い丈ぢハは牛ぎのの

ナアニ空のまはつた  
馬場の吉原院ト申す  
所

いふ後とてんつ  
のサレたうら  
まゆあやあま  
のわれどもと  
え

みたもの  
をうつくしい  
とあふの  
とが  
ね  
う  
人  
を  
う  
と  
ま  
さ  
ら  
ん  
が

迷ふ  
ま  
ら  
る  
中  
う  
ま  
ら  
る  
お  
ち  
や  
ア  
つ  
ら  
い  
ら  
ら  
よ  
を  
せ  
と  
な  
ぬ  
が

と  
ま  
ら  
る  
ま  
由  
れ  
換  
ぐ  
と  
あ  
ら  
ん  
止  
ら  
ん  
が  
ね  
ら  
り  
し  
と  
の  
ん  
ど

ろ  
ら  
ぬ  
ひ  
と  
ま  
ら  
ぬ  
あ  
ら  
し  
く  
約  
め  
ら  
る  
ら  
ぬ  
と  
と  
ら  
が

水  
ま  
あ  
ら  
い  
の  
ん  
ど  
ら  
れ  
と  
も  
な  
ま  
ら  
し  
め  
ら  
る  
ら  
ぬ  
と  
と  
ら  
が

衣  
祝  
と  
と  
が  
ま  
さ  
ら  
る  
ら  
ぬ  
と  
と  
ら  
が  
中  
に  
ま  
ら  
る  
ら  
ぬ  
と  
と  
ら  
が



あま色まいざつ何なんどうもんきるはりのりだへとしまふ困つくる

のんごうどううう宜い思し案あんへおませんうねん番ばん九く板ばんササねね松しょうが

橋はしさんさんのの教きょうをを志しつつくくとと性せいつつててああげげんんのの宜いれれどどももトト誓ちかせせくく

ままととややアア蘭らん板ばんとと成せい十じゅう清せい雨う殿でん七しち古こののがが橋はしさんさんのの教きょうをを船ふねつつ

くくるるだだろろううららのの權ごん家かのの積つみどど伊い勢せ宿しゆく殿でんもも三さん河が殿でんもも

梅うめああいいううららのの唯ただ今いま七しちのの打うち終しまてて后こう林りんがが性せい古こ當たう寺じのの河が權ごん

家かふふ尚しやう恆こうののふふりりののぎぎざざんんままううここがが唯ただ今いま七しちのの何なんああらら

河が邊へんをを船ふね持もちりりままああれれううららぬぬううししんん后こう座ざららううちちああららせせしし橋はし殿でんをを

見<sup>ま</sup>けらるれ<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>加<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>往<sup>い</sup>上<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>存<sup>ぞん</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>筆<sup>しつ</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>教<sup>しやう</sup>ま<sup>ま</sup>す。

見<sup>ま</sup>け<sup>け</sup>ず<sup>ず</sup>申<sup>まへ</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>様<sup>さま</sup>柳<sup>やなぎ</sup>心<sup>こころ</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ど<sup>ど</sup>此<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>み<sup>み</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>。

ね<sup>ね</sup>七<sup>しち</sup>ア<sup>ア</sup>で<sup>で</sup>ね<sup>ね</sup>々<sup>々</sup>申<sup>まへ</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>ア<sup>ア</sup>乃<sup>なほ</sup>柳<sup>やなぎ</sup>志<sup>し</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>母<sup>はは</sup>今<sup>いま</sup>が<sup>が</sup>秀<sup>ひで</sup>の<sup>の</sup>さん<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>

公<sup>こう</sup>通<sup>と</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>志<sup>し</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>母<sup>はは</sup>々<sup>々</sup>あ<sup>あ</sup>や<sup>や</sup>な<sup>な</sup>柳<sup>やなぎ</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>

見<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>サ<sup>サ</sup>七<sup>しち</sup>申<sup>まへ</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>べ<sup>べ</sup>が<sup>が</sup>柳<sup>やなぎ</sup>教<sup>しやう</sup>を<sup>を</sup>九<sup>く</sup>ツ<sup>つ</sup>ん<sup>ん</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>色<sup>いろ</sup>ナ<sup>な</sup>母<sup>はは</sup>々<sup>々</sup>九<sup>く</sup>ツ<sup>つ</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>

あ<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>申<sup>まへ</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>ね<sup>ね</sup>柳<sup>やなぎ</sup>儀<sup>ぎ</sup>ハ<sup>ハ</sup>か<sup>か</sup>秀<sup>ひで</sup>乃<sup>なほ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>が<sup>が</sup>お<sup>お</sup>出<sup>い</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>存<sup>ぞん</sup>が<sup>が</sup>を<sup>を</sup>

あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>と<sup>と</sup>申<sup>まへ</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>柳<sup>やなぎ</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>秀<sup>ひで</sup>十<sup>じゆ</sup>二<sup>に</sup>を<sup>を</sup>教<sup>しやう</sup>

柳<sup>やなぎ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>本<sup>もと</sup>々<sup>々</sup>亦<sup>また</sup>父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>柳<sup>やなぎ</sup>志<sup>し</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>母<sup>はは</sup>。

ツイカを安んずるに困るんぞとてお孫 秀へまごめ

御事請はるる母が独任ぐ仕合ダ七 其だツククハ勿体也

心まぶなあんどもを侮が止物なでほしえ居るやア孫ん

おつん困るゑア志あいに及れどもた極てあいのんごうと云

心も骨う折らアね其由ツイに心をな親附とあつるゆゆし

あんの申心もいゝの毒ぐとて 其由かあが温厚ううサ橋

さんのまを人ううらうらびお葉菜でもまらりののあつるま

女子がア母御お構とにみとが書ナ七 其ま名ア由定てん



トのみぎらの現行い、を榜あがまをす雲由の相おひ、トをの猪貝  
え秀志の子の彼の人の吉祥院のおまをとのおまを以みしの之  
わ院のゆを流さらしとらく并修持並へ為為為為為為為為由  
のくとあまあまをれどる筆を運ひりし由の初を子を想をとらえ  
のゆめを彼のか秀がづのおお住をてる吉祥院の隠けけらぶ  
い畢を竟持三年以て終りやを終りや并決をと終ぬらる  
かのづくいにを解あると

花曆討し 二編中巻

*[Faint, illegible handwriting, likely bleed-through from the reverse side of the page.]*

*[Faint, illegible handwriting, likely bleed-through from the reverse side of the page.]*

*[Faint, illegible handwriting, likely bleed-through from the reverse side of the page.]*

*[Faint, illegible handwriting, likely bleed-through from the reverse side of the page.]*